法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

近代以降の隅田川右岸中小河川における橋詰広場の変遷

原田, 真央 / HARADA, Mao

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院デザイン工学研究科
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies. Art and Technology
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
8
(発行年 / Year)
2023-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030262

近代以降の隅田川右岸中小河川における橋詰広場の変遷

ANALISYS OF LOCATIONAL AND FUNCTIONAL TRASITION
OF BRIDGE SIDE SPACE IN THE CENTRAL TOKYO

原田真央
Mao HARADA
主査　福井恒明　　副査　高見公雄

法政大学大学院デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻修士課程

The purpose of this study is to clarify the physical and functional transition of bridge side space in central Tokyo from the period of modernization to the present, and to analyze factors of the changes and its role in the urban area. The results of map data survey and literature review indicate that bridge side space has changed with its facilities under the influence of urban planning, status of river reclamations. On the other hand, it was also revealed that in each period it functioned as a buffer to receive the necessary facilities for the city.
Key Words *: Bridge Side Space, River, Functional Transition, Urban Role*

１．序論

（１）研究背景

都市空間における公共的な場の一つに橋詰広場がある．橋詰広場は，橋の取り付く道路の幅員よりも橋の幅員が狭かったために，橋詰に広場的な余地が生まれて形成された[1]．橋詰広場という用語は，明治維新後に定着したが，実体としては江戸時代初期には既に存在していたとされ，レジャーを担う床見世や情報機能を担う高札場，防災機能を担う火の見櫓など，多様な都市機能が集積していた[2]．また，江戸市街の橋梁のたもとには，船から人や物資を揚げ降ろす流通機能を担う河岸が発達し[3]，橋詰広場は街路と水辺を繋ぐ公共空間であった．関東大震災後の帝都復興事業では，橋詰広場の大きさや設置施設の種類が初めて制度化され，交番や材料置場など様々な施設が設置できる空間として注目されたほか[4]，戦災復興事業の街路計画標準でも，橋詰への充分な広場設置が規定されていた[5]．しかし，1964 年（昭和 39）及び 1966 年（昭和 41）の都市計画全面改正に伴う街路計画の見直しにより，橋詰広場の新設はしないとの方針がとられ[6]，1974 年（昭和 49）に作成された都市計画道路の計画標準では，震災・戦災復興にあった橋詰広場に関する記述は見られなくなった．

このように，江戸期には多様な都市機能が集積していた橋詰広場は，震災・戦災復興時には設置が規定され，近代的な施設が置かれていった．その後，急激な都市化に伴う河川の埋め立てが進む中で，機能の多様性が失われて，近年では空間としては存在するものの，フェンスや柵で囲われて立ち入り禁止となるなど，効率重視の管理形態によって公共空間として有効活用されていないものが多く，橋詰広場の変遷にも都市の近代化の影響が見てとれる．一方，2010 年代に入ると観光船の乗り場として利用されるなど，水辺という立地の特徴を活かした事例も一部見られるようになり，地域によっては水辺の見直しに向けて橋詰広場を活用する整備方針がとられている．

そこで本研究では，近代から現代に至るまでに用途が変化してきた橋詰広場に着目し，その歴史的特性や空間的特徴を把握することで，今後の都市における水辺復権に向けた示唆を与えることを目指す．

（２）目的と方法

本研究では，明治から現代にかけての東京都心部における橋詰広場の存在や設置施設の変遷過程とその変化要因を把握し，橋詰広場が担ってきた都市的役割を明らかにすることを目的とする．

以上の目的を達成するために，①橋詰広場の存在や設置施設の数量的な変遷，及び立地的な分布状況を把握する地図資料調査，②橋詰広場や設置施設の時代状況，及び社会情勢や都市政策との関連を把握する文献調査を行う．

（３）既往研究と本研究の位置づけ

橋詰広場を対象とした既往研究には，橋詰広場の設置施設の変容や分布に関する研究として，伊東（1986）[7]の日本橋橋詰広場の変遷を明らかにした研究，高畑ら（1998）[8]の下町 3 区（墨田・江東・中央）における震災復興橋詰広場の施設分布を明らかにした研究，伊東ら（1999）[9]の

中央区における戦災復興以降の橋詰広場の変容を明らかにした研究，伊東ら（2010）[10]の帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況を明らかにした研究などがある．また，橋詰広場のデザイン的特徴に関する研究として，伊東ら（1984）[11]の旧東京市市内における震災復興橋梁のデザイン的特徴を明らかにした研究，堀ら（1990）[12]の江戸時代後期における橋詰広場のデザイン規範を明らかにした研究がある．さらに，橋詰広場の空間特性と利用特性に関する研究として，伊東ら（1991）[13]の旧東京市に設置された橋詰広場の空間的特徴と周辺住民の利用状況を明らかにした研究などがある．

これらの既往研究は，対象期間が江戸期や震災・戦災時，あるいは現在といった限定的なものが多く，より通時的な調査が必要であると考えられる．また，特定の地域や橋梁を対象としたものも存在し，対象範囲をさらに拡大して網羅的な調査を行う必要があると考えられる．これに対して，藤田ら（2020）[14]の先行研究では，千代田区内に存在した 84 橋を対象に，1876 年（明治 9）から 2020 年（令和 2）までの 19 時点の地図資料を用いて，通時的に橋詰広場の設置施設や用途の数量的な変遷を明らかにした．

本研究では，藤田らの先行研究を踏襲し，対象橋梁をさらに拡大して，東京都心部における橋詰広場の在り様についての一般性を高めるほか，数量的な変遷に加えて，橋詰広場における変化の要因や都市的な役割を把握することで，橋詰広場が如何なる経緯で現在の姿になったのかを明らかにすることを目指す．

２．研究対象

（１）対象範囲

対象地は，東京都心部のうち隅田川右岸にて 18 の中小河川が流れる千代田区・中央区内の地域とする（**図 1**）．

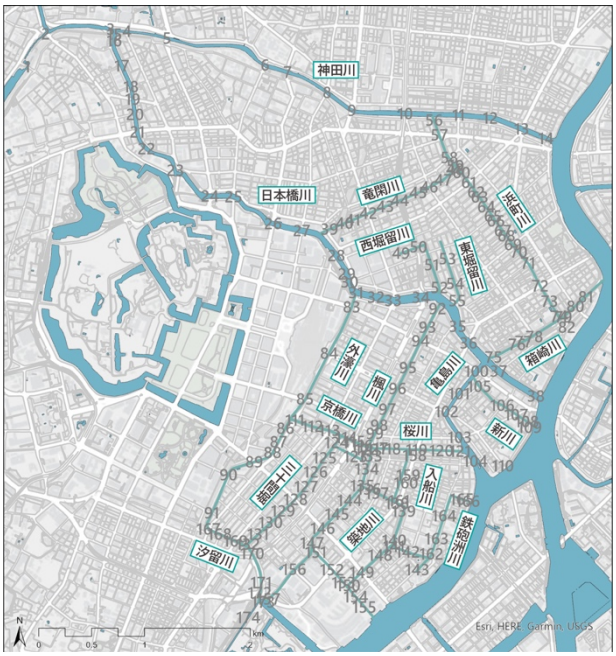

図 1　本研究の対象範囲

この地域は，江戸期から舟運による生活が発達し，数多くの橋梁が存在していた．また，1889 年（明治 22）からの東京市区改正による市街地の整備や，1923 年（大正 12）の関東大震災，及び 1945 年（昭和 20）の東京大空襲による市街地の焼失，さらには，戦後以降の高度経済成長による急速な都市化など，多くの変革を経験してきた．

このように，明治から現代にかけて都市空間が変貌してきた地域では，橋詰広場にも影響が生じたと考える．

（２）対象橋梁

『新編千代田区史[15]』『千代田まち辞典[16]』『中央区史[17]』『中央区の橋・橋詰広場[18]』『東京の橋 100 選＋100[19]』より，対象とする 174 橋を抽出した（**表 1**）．

表 1　対象範囲の橋梁一覧

No	神田川に架かる橋梁　全14橋				
1	牛込橋	2	飯田橋	3	小石川橋
4	後楽園橋	5	水道橋	6	御茶ノ水橋
7	聖橋	8	昌平橋	9	万世橋
10	和泉橋	11	美倉橋	12	左衛門橋
13	浅草橋	14	柳橋		
No	日本橋川に架かる橋梁　全24橋				
15	三崎橋	16	新三崎橋	17	あいあい橋
18	新川橋	19	堀留橋	20	南堀留橋
21	俎橋	22	宝田橋	23	雉子橋
24	一ツ橋	25	錦橋	26	神田橋
27	鎌倉橋	28	新常盤橋	29	常磐橋
30	常盤橋	31	一石橋	32	西河岸橋
33	日本橋	34	江戸橋	35	鎧橋
36	茅場橋	37	湊橋	38	豊海橋
No	竜閑川に架かる橋梁　全10橋				
39	龍閑橋	40	白旗橋	41	西中之橋
42	今川橋	43	東中之橋	44	地蔵橋
45	火除橋	46	九道橋	47	甚兵衛橋
48	玉出橋				
No	西堀留川に架かる橋梁　全4橋				
49	雲母橋	50	道浄橋	51	中之橋
52	荒布橋				
No	東堀留川に架かる橋梁　全3橋				
53	万橋	54	親父橋	55	思案橋
No	浜町川に架かる橋梁　全19橋				
56	柳原橋	57	大和橋	58	岩井橋
59	橋本橋	60	竹森橋	61	鞍掛橋
62	緑橋	63	汐見橋	64	千鳥橋
65	問屋橋	66	栄橋	67	高砂橋
68	元高砂橋	69	小川橋	70	久松橋
71	蠣浜橋	72	中之橋	73	浜洲橋
74	川口橋				
No	箱崎川に架かる橋梁　全8橋				
75	箱崎橋	76	新永久橋	77	永久橋
78	土州橋	79	女橋	80	菖蒲橋
81	男橋	82	中洲橋		
No	外濠川に架かる橋梁　全9橋				
83	呉服橋	84	八重洲橋	85	鍛冶橋
86	有楽橋	87	新有楽橋	88	丸ノ内橋
89	数寄屋橋	90	山下橋	91	新幸橋

No	楓川に架かる橋梁　全8橋				
92	兜橋	93	海運橋	94	千代田橋
95	新場橋	96	久安橋	97	宝橋
98	松藩橋	99	弾正橋		
No	亀島川に架かる橋梁　全5橋				
100	霊岸橋	101	新亀島川	102	亀島川
103	高橋	104	南高橋		
No	新川に架かる橋梁　全6橋				
105	一之橋	106	新川橋	107	東新川橋
108	三之橋	109	廻漕橋	110	栄橋
No	京橋川に架かる橋梁　全6橋				
111	城辺橋	112	紺屋橋	113	京橋
114	炭谷橋	115	新京橋	116	白魚橋
No	桜川に架かる橋梁　全5橋				
117	新桜橋	118	桜橋	119	中之橋
120	八丁堀橋	121	稲荷橋		
No	三十間堀に架かる橋梁　全11橋				
122	新福寺橋	123	豊蔵橋	124	水谷橋
125	紀伊国橋	126	豊玉橋	127	朝日橋
128	三原橋	129	木挽橋	130	賑橋
131	出雲橋	132	八通八橋		
No	築地川に架かる橋梁　全25橋				
133	新金橋	134	新富橋	135	三吉橋
136	相引橋	137	築地橋	138	入船橋
139	軽子橋	140	暁橋	141	堺橋
142	南明橋	143	明石橋	144	亀井橋
145	祝橋	146	万年橋	147	采女橋
148	備前橋	149	門跡橋	150	小田原橋
151	北門橋	152	市場橋	153	起生橋
154	海幸橋	155	安芸橋	156	千代橋
157	尾張橋				
No	入船川に架かる橋梁　全4橋				
158	北船見橋	159	船見橋	160	新富橋
161	南新富橋				
No	鉄砲洲川に架かる橋梁　全5橋				
162	新湊橋	163	浦堀橋	164	見富橋
165	小橋	166	鉄砲洲橋		
No	汐留川に架かる橋梁　全8橋				
167	土橋	168	難波橋	169	新橋
170	蓬莱橋	171	汐留橋	172	汐先橋
173	南門橋	174	中の御門橋		

３．橋詰広場の地図資料調査

（１）調査に用いる地図資料

橋詰広場を確認できる資料には，古地図，都市計画図，住宅地図の地図資料と，古写真，図絵，空中写真の画像資料がある．都市計画図は，主目的が用途地域であるため橋詰広場の存在や設置施設の詳細は読み取りにくい．古写真や図絵は，橋詰広場の様子を詳細に確認できるが，ある一時点における橋梁のみを描写したものが多く，通時的な情報は得られにくい．また，空中写真では，橋詰広場における植栽と建物以外の設置施設の確認が困難である．

そのため，本研究では橋詰広場の様子を通時的に読み取ることができる古地図・住宅地図を用いて，明治期以降に発行された 17 時点の地図資料を調査する（**表 2**）．

（２）調査方法と資料の読み取り

対象とする 174 橋に対し，右岸左岸及び上流下流の各 4 ヶ所の計 696 ヶ所の橋詰広場を調査する．橋詰広場の有無の判定方法は，藤田らの先行研究を引き継ぎ，空間の広がりを読み取れる場合は「空地」または設置施設とし，読み取れない場合は「存在しない」と判別した（**図 2**）．

戦前（1870年代から1940年代）の地図資料は，主に縮尺1/5000の古地図を使用し，交番や見附，公衆電話などが読み取れる．ただし，1930年代の東京地籍図は，縮尺が1/2100で公衆トイレや資材置場が記載されているほか，1940年代の帝都地形図は，縮尺が1/3000で植栽の記載がされており，前後の年代では見られない情報が読み取れた．戦後（1950年代から2020年代）の地図資料は，縮尺1/1500-2000の住宅地図を使用し，公園や児童遊園，公衆トイレなど記載されている情報が多様で，安定的に情報を読み取ることができる（**図3**）．ただし，現在でも公衆電話は実在しているが，戦後以降の地図では公衆電話の記載が見られなくなった．なお，橋梁が確認できない場合は「未架橋」と判別したが，河川の埋め立て後・廃橋後も形状や設置施設から，橋詰広場の痕跡または活用が確認できる橋梁は引き続き調査した．

表 2　使用する地図資料一覧

年代		地図資料名	
1870s	1876	明治東京全図	柏書房, 1998
1880s	1886-88	東京実測全図	柏書房, 1998
1890s	1895	東京実測全図	柏書房, 1998
1900s	1907	東京十五区番地界入地図	人文社, 1986
1910s	1911	番地界入東京全図	柏書房, 1990
1920s	1919-22	番地界入東京全図	柏書房, 1990
1930s	1932-35	東京地籍図	不二出版, 2010
1940s	1947	帝都地形図	之潮, 2005
1950s	1957-58	全住宅案内図帳	人文社, 1957-58
1960s	1962-63	全住宅案内図帳	人文社, 1962-63
1970s	1972	全航空住宅地図	同印刷部, 1972
	1978	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 1978
1980s	1986	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 1986
1990s	1998	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 1998
2000s	2004	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 2004
2010s	2010	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 2010
2020s	2020	ゼンリン住宅地図	ゼンリン, 2020

図 2　資料の読み取り①[注)]

図 3　資料の読み取り②[注)]

（３）調査結果

a）対象地全域における設置施設数の変遷

調査により得られた対象地全域における設置施設数の変遷を**表 3** に示す．空地，警察署，消防署，郵便局，交番，見附，公衆電話，公衆トイレ，公園・児童遊園，植栽，地下鉄口，高速道路ランプ，駐車場・駐輪場，資材置場・防災倉庫，詰所，神社の 16 の施設が確認できた．

b）河川ごとの橋詰広場数の変遷

調査により得られた各年代における河川ごとの橋詰広場数の変遷を**図 6** に示す．ここでは，水面の有無や埋め立て時期に着目し，河川の埋め立て状況について，①現存する水面ありの河川，②帝都復興期埋め立て河川，③戦後復興期埋め立て河川，④高速道路建設埋め立て河川，⑤1970 年代のその他埋め立て河川の 5 種類に分類した．

（４）分析

a）設置施設の変遷からみた時期区分

数量的な変遷に着目すると，都市計画上の時期区分に対応していることが読み取れる．

1870 年代から 1920 年代までの市区改正期では，空地が多くを占め，交番や公衆電話は増加する一方，見附は大正期にかけて減少している．1930 年代から 1940 年代までの震災・戦災期では，橋詰広場数が最大となり，施設の多様化が促進している．1950 年代から 1970 年代までの高度経済成長期では，空地や交番，橋詰広場数が減少する一方，公園・児童遊園や高速道路ランプをはじめとする交通施設が増加している．1980 年代から 2020 年代までの現代では，前期の特徴を踏襲しつつも，全体を通して施設は充実しており，橋詰広場を活用している傾向にある．

表 3　対象地全域における設置施設数の変遷

年代		空地	警察署	消防署	郵便局	交番	見附	公衆電話	公衆トイレ	公園児童遊園	植栽	地下鉄口	高速道路ランプ	駐車場駐輪場	資材置場防災倉庫	詰所	神社	存在しない	架橋数/174	橋詰広場数
1870s	1876	288	0	0	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	58	91	306
1880s	1886-88	396	1	0	2	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	69	121	415
1890s	1895	397	2	0	2	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	83	125	417
1900s	1907	429	3	1	3	28	10	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46	131	478
1910s	1911	409	5	1	5	30	8	20	0	0	0	0	0	0	0	0	1	61	133	471
1920s	1919-22	419	4	1	5	37	2	23	0	0	0	0	0	0	0	0	1	63	136	481
1930s	1932-35	390	4	3	3	47	0	0	54	6	0	0	0	0	16	2	3	110	155	510
1940s	1947	385	4	2	3	45	0	12	0	7	18	0	0	0	0	0	5	148	155	472
1950s	1957-58	191	3	3	4	23	0	0	14	43	2	2	0	5	11	3	3	194	123	298
1960s	1962-63	177	3	3	4	23	0	0	15	49	2	2	0	5	16	3	3	174	117	294
1970s	1972	118	4	2	5	27	0	0	45	74	9	6	21	11	8	6	3	156	114	300
	1978	100	4	2	5	24	0	0	44	79	1	11	21	18	8	5	4	148	108	284
1980s	1986	89	3	2	5	20	0	0	47	95	19	16	24	13	13	8	5	112	102	296
1990s	1998	73	3	1	5	16	0	0	56	94	30	24	24	18	17	6	6	106	101	298
2000s	2004	69	2	1	5	15	0	0	56	95	29	24	24	13	14	3	6	111	101	293
2010s	2010	74	2	2	5	14	0	0	51	86	24	24	24	16	8	3	6	125	102	283
2020s	2020	77	2	2	4	14	0	0	46	84	30	24	24	16	9	2	6	122	102	286

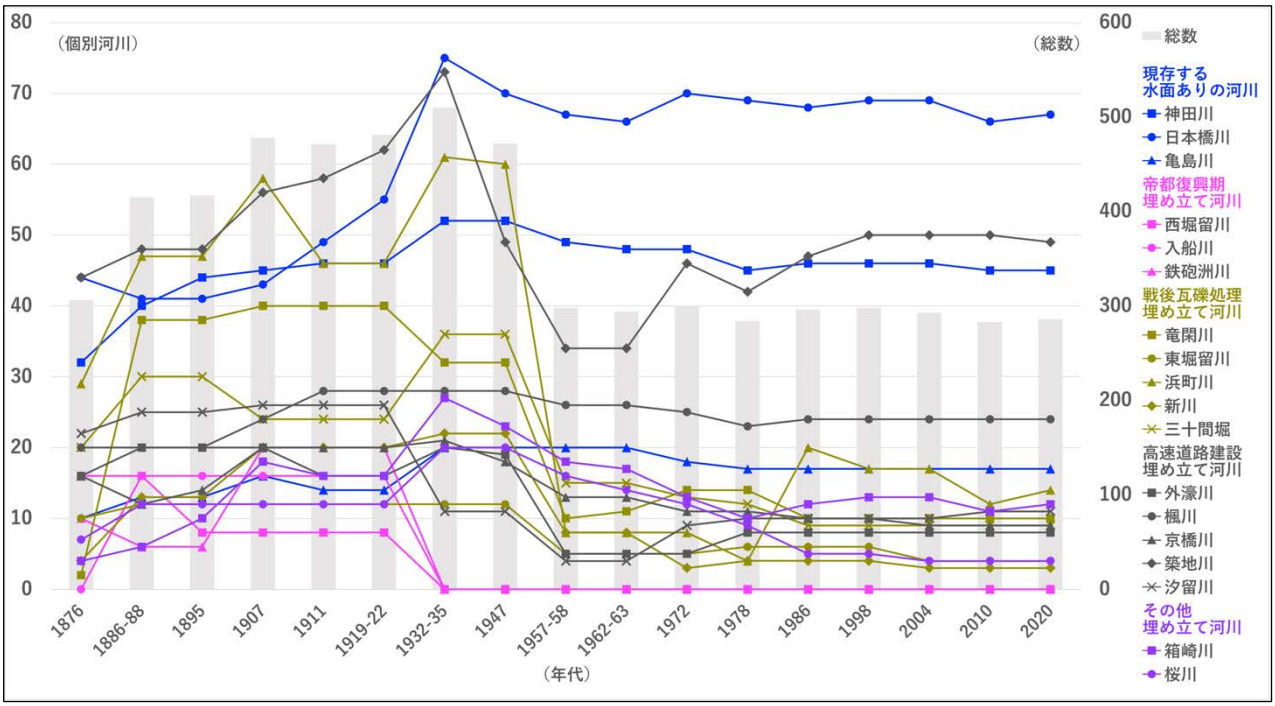

図 6　河川ごとにみた橋詰広場数の変遷

b）河川ごとの転用傾向と主要用途

河川の埋め立て状況によって橋詰広場の存在に違いがあることから，神田川を例に転用傾向を分析する（**表 4**）．

明治から現代にかけて，多様な施設が空地へと転用しており，その時期に傾向はなく点々としている．また，交番，公衆トイレ，公園・児童遊園といった施設は空地からの転用が多く，その時期は継続的に見られ，大正期以降は空地から存在しない（建物建設などの用地）への転用も多く見られる．このように，神田川における橋詰広場は，各時代に必要に応じて施設が更新されており，その際に空地が都合よく利用される傾向にある．

次に，河川の埋め立て状況ごとに主要用途を分析する．ここでは，明治から現代までの延べ数を示し，橋詰広場に対する設置施設の延べ数の割合を色別で表現した（**表 5**）．

全ての河川で空地が圧倒的な割合を占めている．現存する水面ありの河川は，多様な施設にも活用されている一方，帝都復興期埋め立て河川は，交番のみ活用が見られる．戦後以降の埋め立て河川は，公衆トイレや公園・児童遊園の活用が多く見られるが，一部の河川では地下鉄口や高速道路ランプなどの交通施設への活用が目立つ．

このように，水面の有無や埋め立て時期といった河川の埋め立て状況によって，橋詰広場の活用に違いがある．

表 4　神田川における橋詰広場の転用数（一部抜粋）

転用前	警察署	消防署	見附	公衆電話	公衆トイレ	公園	資材置場	詰所	空地	消防署	公衆電話	存在しない	空地	公衆電話	存在しない	空地	資材置場	詰所	空地	公衆トイレ
転用後	空地								交番				公衆トイレ			公園・児童遊園			存在しない	
1876-1888	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1888-1895	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1895-1907	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1907-1911	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1911-1922	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1922-1935	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	1	0	0	0	2	1
1935-1947	0	0	0	0	7	0	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1947-1958	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	3	0	0	3	0
1958-1963	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
1963-1972	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	4	0	2	1	1	1	1	0
1972-1978	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	2	1
1978-1986	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
1986-1998	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2	1	0	0	1	0
1998-2004	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2004-2010	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
2010-2020	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	2	1	4	2	7	5	5	1	11	1	1	1	13	1	5	11	1	1	10	5

4．橋詰広場の文献調査

（1）調査に用いる文献資料

調査には主に議会議事録と区史等を使用し，補足的に事業報告誌（帝都復興事業誌と戦災復興誌）やその他の資料（関連書籍や既往研究）を用いる．議会議事録は，各自治体がアーカイブ資料としてインターネットに掲載している『東京都議会会議録[20]』『千代田区議会議事録[21]』『中央区議会会議録[22]』を使用した．また，資料の対象期間の都合上，1980 年代以前は各区史と東京市史稿を，1980 年代以降は議会議事録をそれぞれ中心に用いた．

表 6　使用した文書内の発言分類

		東京都議会会議録	千代田区議会議事録	中央区議会会議録	合計
使用した文書数（部）		33	53	46	132
文書内の発言数（件）	橋詰	18	19	13	50
	交番	12	2	4	18
	公衆トイレ	4	30	9	43
	公園・児童遊園	6	35	34	75
	植栽	16	12	22	50
	地下鉄口	2	0	0	2
	高速道路ランプ	4	0	0	4
	駐車場・駐輪場	3	0	7	10
	資材置場・防災倉庫	2	1	8	11
	詰所	0	3	0	3
	その他	5	27	28	60

表 5　河川ごとにみた明治から現代にかけての橋詰広場と設置施設の延べ数

【凡例】 50%以上　10%以上　5%以上　3%以上　1%以上

河川の分類		空地	警察署	消防署	郵便局	交番	見附	公衆電話	公衆トイレ	公園児童遊園	植栽	地下鉄口	高速道路ランプ	駐車場駐輪場	資材置場防災倉庫	詰所	神社	橋詰広場数
現存する水面あり	神田川	438	21	13	22	82	12	15	68	83	9	44	0	7	25	5	0	775
	日本橋川	579	0	0	19	59	28	15	108	125	48	12	70	7	35	25	0	1029
	亀島川	159	0	2	0	16	0	4	28	51	9	4	0	7	11	0	14	280
帝都復興期埋め立て	西堀留川	58	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64
	入船川	80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	80
	鉄砲洲川	79	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	82
戦後瓦礫処理埋め立て	竜閑川	275	0	0	0	17	0	2	20	56	5	0	0	4	10	1	2	361
	東堀留川	86	0	0	0	11	0	4	18	32	0	0	0	2	2	0	0	139
	浜町川	385	2	0	0	23	0	4	20	49	48	0	5	2	7	1	0	502
	新川	139	0	0	0	3	0	0	17	18	0	0	0	3	0	0	1	174
	三十間堀	209	0	11	2	24	0	3	34	18	0	26	7	14	8	0	0	324
高速道路建設埋め立て	外濠川	117	0	0	0	21	30	2	4	21	0	30	0	5	1	0	0	210
	楓川	277	8	0	0	11	0	4	25	55	6	0	21	3	2	1	10	416
	京橋川	167	16	0	0	18	0	3	15	11	5	0	7	4	1	0	0	236
	築地川	562	0	0	0	34	0	2	50	149	15	5	31	22	11	7	11	840
	汐留川	193	0	0	13	17	0	3	2	0	4	0	21	9	0	0	0	251
その他埋め立て	箱崎川	154	2	0	9	12	0	1	14	6	13	8	0	18	6	0	14	239
	桜川	124	0	0	0	6	0	2	5	38	2	4	0	8	1	1	0	180

（２）調査方法と抽出内容

議会議事録では，橋詰，橋台敷，橋のたもとの 3 つの検索キーワードにより抽出した 193 文書と，橋＋設置施設名で補足的に抽出した 16 文書の計 209 文書を調査し，**表 3** や**図 7–10** を参考に変化要因を整理する．情報が読み取れた 132 文書内の発言数を用途ごとに分類した（**表 6**）．

（３）施設ごとの設置数の変化とその要因

a）交番

市区改正期は，設置数が増加し広範囲に分布するようになるが，これは 1888 年（明治 21）の「警察官吏配置及び勤務概則」策定により，交番の配置が統一的に定められた [23]ことが要因だと考えられる．震災・戦災期は，さらに数が増加し，全体で最大の設置数となるが，これは 1926 年（大正 15）に帝都復興事業の一環で「路上工作物配置標準」が策定され，交番が第一種工作物として橋詰広場への設置が明文化された [24]ことが要因だと考えられる．戦後の急激な減少については，旧警察法の施行や，パトロール制の採用，戸籍調べの廃止といった警察制度の改革により，交番が整理統合されたことが要因であり，その後は「交番がなく不安」という市民の要望により，一部法改正されて配置が改善される [25]．現代でも減少傾向にあるが，2000 年以降の空き交番問題 [26]の対策として都内交番が整理統合されたこと [27]や，設置場所や老朽化の指摘から移転計画が実施 [28]されたことなどが要因だと考えられる．

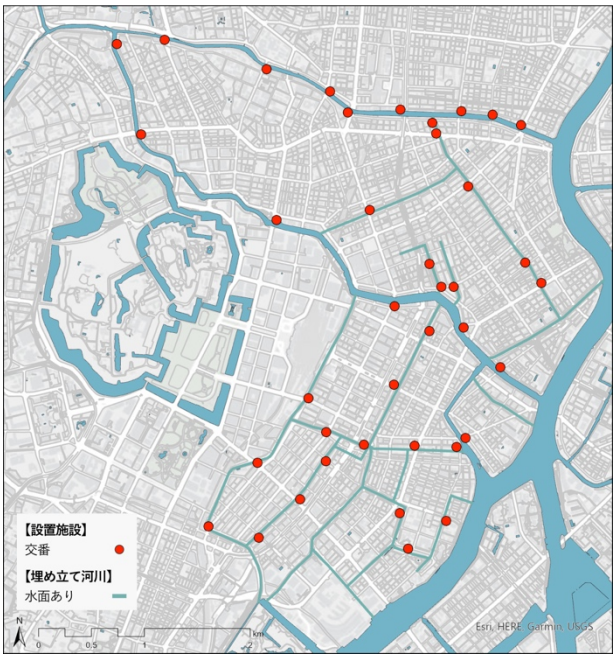

図 7　市区改正期における設置施設の分布

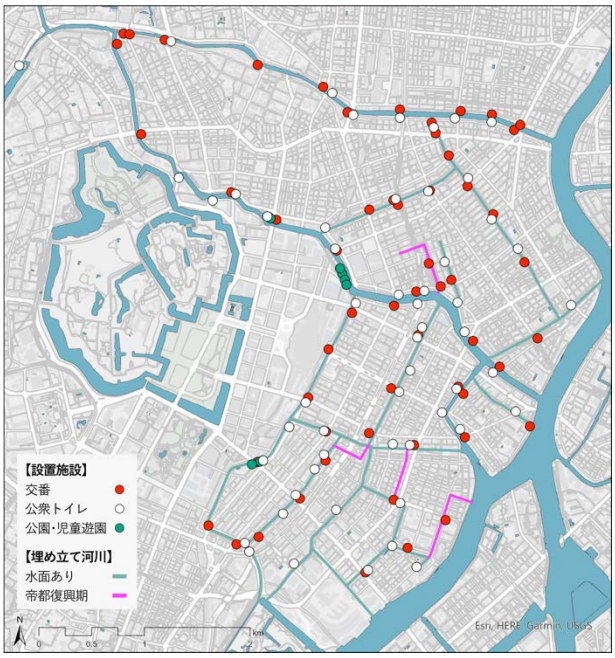

図 8　震災・戦災期における設置施設の分布

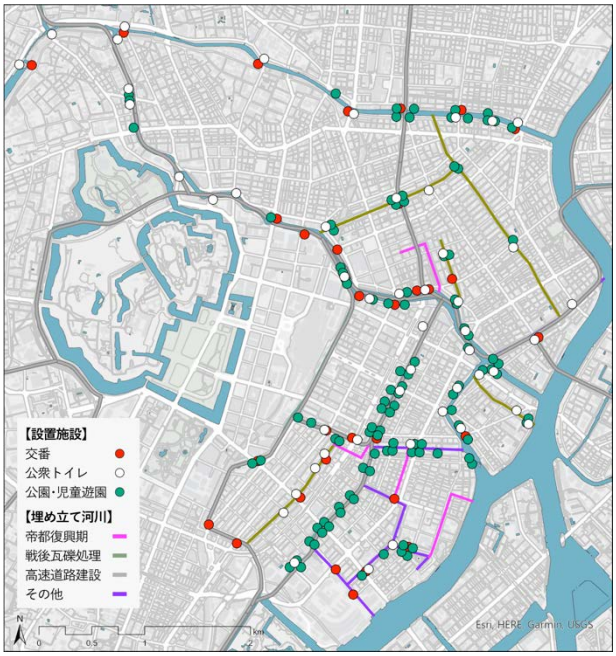

図 9　高度経済成長期における設置施設の分布

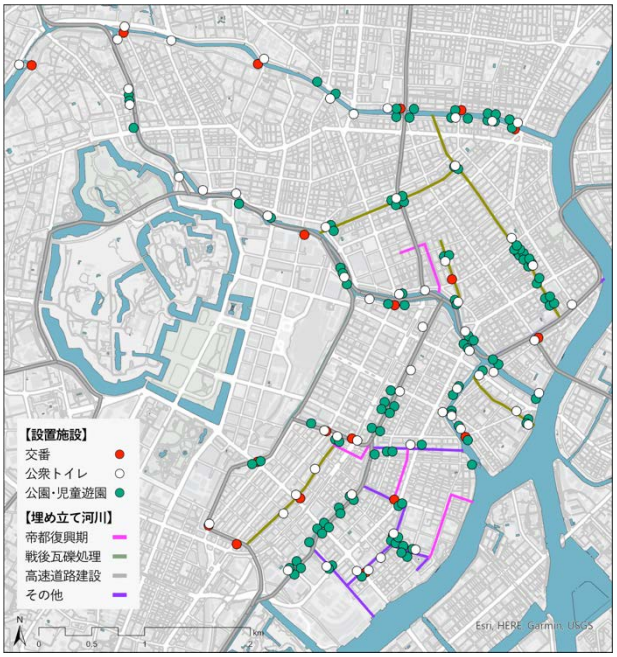

図 10　現代における設置施設の分布

b）公衆トイレ

1886 年（明治 19）の「街頭便所構造改良方法及び設置箇所通達」で橋台地への設置が明文化[29]されており，市区改正期には公衆トイレが設置されていたと推測されるが，地図上では確認できない．震災・戦災期には，数が増加し広範囲に分布するが，これは「路上工作物配置標準」策定により公衆トイレが第一種工作物として橋詰広場への設置が明文化[30]されたことが要因と考えられる．戦後から高度経済成長期にかけての増加については，1948 年（昭和 23）の「児童福祉法」制定[31]や，1956 年（昭和 31）の「都市公園法」制定により公園内において公衆トイレの設置が義務化[32]されたことが要因と考えられる．この時期は，公衆トイレの美観上の問題から，公園や緑地帯と併せた整備が推進されている[33]．現代の減少については，公衆トイレの治安悪化や利用者層の偏りから，配置改善を求める声が上がったこと[34]が要因と考えられる．千代田区では 2004 年（平成 16）に「公衆便所設置及び管理条例」を改正し，必要性の低い公衆トイレを撤去している[35]．

c）公園・児童遊園

戦時中は高射砲の陣地やバラック建設の用地に公園が利用され，公園数が少ない[36]．戦後以降の急激な増加の要因としては，1948 年（昭和 23）の「児童福祉法」の方針で「橋のかけかえのために確保してある空地を使って，何とか公園化しよう」[37]とした橋詰広場の公園化が考えられる．また，戦災復興での「連続する緑が生み出す景観」という設計思想[38]や高速道路への景観配慮[39]，1985 年（昭和 60）の「第 2 次東京長期計画」による都市景観の向上[40]など，緑への配慮が高まり，公園化が推進されたと考えられる．近年の減少傾向は，児童遊園内の子どもの減少や喫煙者の増加を背景に，他施設への転用を求める市民からの要望[41]によるものと考えられ，2019 年（令和元）には地蔵橋児童遊園が保育園に転用されている[42]．

５．考察

（１）橋詰広場の変化要因の考察

a）変化要因①：時期ごとの都市計画の方針

橋詰広場の変化には，時期ごとの都市計画の方針が影響していると考えられる．市区改正期は，道路基盤を中心とした都市整備を背景に，橋詰広場は，1873 年（明治 6）の「葭簀張床店取除けの府令」で娯楽機能が撤廃[43]して空地化が進み，1876 年（明治 9）の「河岸地規則」の火除け地としての設置方針[44]や，1919 年（大正 8）の「街路構造令」の馬車や路面電車を交通緩和する設置方針[45]を考慮すると，余地的空間として利用されていたと考えられる．震災・戦災期には，帝都復興事業による橋詰広場の制度化に伴い，交番や公衆トイレなど多様な施設が設置され，戦災復興事業でも広場設置が明文化されたことから，大規模な復興政策が橋詰広場の設置や用途に影響を与えたと考えられる．高度経済成長期には，急速な都市化に伴う河川の埋め立てにより，橋詰広場が大幅に消滅し，代わりに地下鉄口や高速道路ランプや建物建設の適地となったことから，都市の経済的発展に橋詰広場が利用されたと考えられる．現代では，都市景観の向上から公園・児童遊園を中心に橋詰広場が活用される傾向にある．

このように，都市基盤の改変や社会情勢の変化に対応して橋詰広場も変化しており，時期ごとの都市計画の方針によって橋詰広場も変化してきたと考えられる．

b）変化要因②：河川の埋め立て状況

水面の有無や埋め立て時期といった河川の埋め立て状況と橋詰広場の変化に関係があると考えられる．現存する水面ありの河川では，橋詰広場が明治から現代まで比較的多く存在しており，警察署や消防署をはじめ多様な施設に活用されていることから，水面の有無が橋詰広場の存在や活用の差に関係していると考えられる．神田川を見ても，空地から・空地への転用が積極的で，多様な施設に転用している傾向がある．また，帝都復興期埋め立て河川は，橋詰広場の活用が見られない一方，戦後瓦礫処理及び高速道路建設埋め立て河川では，埋め立て後も公園・児童遊園を中心に活用が見られており，河川の埋め立て時期と橋詰広場の活用の間にも関係があると考えられる．

このように，水面の有無や埋め立て時期によって橋詰広場の存在や活用に違いが見られることから，河川の埋め立て状況も変化要因の一つである可能性が見出だせる．

c）変化要因③：施設設置を要請する背景

施設設置を要請する背景が橋詰広場の変化に影響していると考えられる．交番は，帝都復興事業の「路上工作物配置標準」により橋詰広場への設置が明文化され，旧警察法の制定やパトロール制の採用，戸籍調べの廃止等の警察制度の改革，さらには市民からの交番設置の要望により数が増減しており，橋詰広場に関する法制度，施設そのものに関する施策，市民からの設置を求める要望に影響していると考えられる．公衆トイレは，「路上工作物配置標準」のほか，美観上公園や緑地帯との併置の義務化が見られ，橋詰広場に関する法制度と施設そのものに関する施策の両方に影響していると考えられる．公園・児童遊園は，戦後の子どもの遊び場確保に向けた施策や都市景観の向上に向けた設置と，利用者減少や喫煙者増加による他施設への転用を求める指摘があり，施設そのものに関する施策と市民からの要望に影響していると考えられる．

このように，橋詰広場の設置施設は，橋詰広場への設置を直接的に明文化する法制度，施設そのものに関する施策，設置状況に対する市民からの要望の大きく 3 つに影響され，橋詰広場にも変化が生じていると考えられる．

（２）近代以降の橋詰広場が担ってきた都市的役割

明治に入り，娯楽機能が撤廃された橋詰広場は，橋の架け替え用地以外に，火除け地や交通緩衝地帯としても活用され，余地的な空間に期待される機能は多様であったと捉えられる．また，帝都復興事業では橋詰広場の制度化に伴い，交番や公衆トイレなどの近代的な施設が単一的に設置されたことや，戦後から高度経済成長期にかけて

急速な都市建設の用地に利用されたことから，橋詰広場は社会情勢に対応できる効率的な空間として機能していたと解釈できる．これは，設置施設数の変遷を見ても分かるように，交番などの公共施設は明治から長期的に，公衆トイレや公園・児童遊園は大正期以降に，地下鉄口や高速道路ランプなどの現代的施設は戦後以降に増加しており，時代によって施設を更新する柔軟性が読み取れる．また，転用の際に保留された空地を利用して必要な施設を取り入れていることから，橋詰広場は非常に利便性の高い空間であると考えられる．加えて，施設の変化は，橋詰広場への設置を直接的に明文化する法制度，施設そのものに関する施策，市民からの要望の影響を受けており，社会的な要請によって変化しやすい空間であると解釈できる．

以上を踏まえ，近代以降の橋詰広場は，高い利便性を有しながら各時代において都市に必要な施設を受け入れるバッファとしての都市的役割を担ってきたと考察できる．

６．結論

（１）成果

橋詰広場の変遷過程について，数量的な変化に着目すると，市区改正期，震災・戦災期，高度経済成長期，現代の 4 つの時期に区分でき，河川の埋め立て状況によって橋詰広場の存在や施設の活用に違いが生じていた．また，橋詰広場の変化要因には，時期ごとの都市計画の目的，河川の埋め立て状況，施設設置を要請する背景の 3 つがあり，近代以降の橋詰広場は，高い利便性を有しながら各時代において都市に必要な施設を受け入れるバッファとしての都市的役割を担ってきたことを明らかにした．

（２）今後の課題

橋詰広場周辺にまで研究対象範囲を拡大し，銀行や証券所などの歴史的建造物まで広範囲に橋詰と捉え，その種類や特性を考慮した上で，橋詰広場の場所的意味を考察する必要がある．また，国内外の他都市における橋詰広場の特徴や変遷過程との比較を行うことで，東京都心部の橋詰広場の特徴や役割をさらに明確にする必要がある．

参考文献

1) 社団法人土木学会：美しい橋のデザインマニュアル，社団法人土木学会，pp.56-57，1982.
2) 伊東孝：東京の水 水辺の景観，鹿島出版会，pp.200-209，1986.
3) 鈴木理生：江戸の川 東京の川，井上書院，pp.125-155，1989.
4) 東京市：帝都復興区劃整理誌 第 1 編 帝都復興事業概観，東京市，pp.408-412，1932.
5) 建設省：戦災復興誌 第 1 巻 計画事業編，都市計画協会，p.90，1959.
6) 東京都：東京の橋と景観，昌光印刷，p.68，1987.
7) 伊東孝：絵地図にみる橋詰広場施設と景観の移り変り−江戸から今日まで−，日本土木史研究発表会論文集，6 巻，pp.198-207，1986.
8) 高畑充宏，伊東孝，秋山哲男，伊東孝祐，溝口秀勝：震災復興橋詰広場にみる施設と分布−下町 3 区(墨田・江東・中央)を事例として−，総合都市研究，第 65 号，pp.95-106，1998.
9) 伊東孝祐，秋山哲男，伊東孝，溝口秀勝：戦災復興計画以降の震災復興橋詰広場の変容について−東京都中央区（旧日本橋区，旧京橋区）をケーススタディとして−，土木史研究，第 19 号，pp.31-39，1999.
10)伊東孝祐，伊東孝，川西崇行：帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況−東京を対象として−，土木史研究，30 巻，pp.199-202，2010.
11)伊東孝，岡田孝：震災復興橋梁の計画とデザイン的特徴−旧東京市内における復興局架設橋梁を中心として−，日本土木史研究発表会論文集，4 巻 pp.59-70，1984.
12)堀繁，篠原修，溝口伸一：伝統的橋詰のデザイン規範−江戸後期の図会類を分析資料にして−，土木史研究，第 10 号，pp.93-102，1990.
13)伊東孝祐，琴基正，山川仁，秋山哲男：橋詰広場の空間的扱いとその利用特性−旧東京市市街地域を例として−，都市計画論文集，26 巻，pp.43-48，1991.
14)藤田景，高柳蓮，福井恒明：千代田区を対象とした橋詰空間の変遷，景観・デザイン研究講演集，No.17，pp.151-156，2021.
15)東京都千代田区：新編千代田区史 区政史資料編，ぎょうせい，pp.379-380，1998.
16)千代田区区民生活部：江戸・東京の歴史をたずねて 千代田まち辞典，図書印刷，pp.176-184，2005.
17)東京都中央区：中央区史 下巻，大日本印刷，pp.379-400，1958.
18)中央区教育委員会：中央区の橋・橋詰広場，廣済堂印刷，pp.52-64，1998.
19)紅林章央：東京の橋 100 選＋100，都政新報社，2018.
20)東京都議会議会局：東京都議会会議録検索 https://www.metro.tokyo.dbsr.jp/index.php/
21)東京都千代田区議会事務局：千代田区議会議事録検索システム http://www.city.chiyoda.tokyo.dbsr.jp/index.php/
22)東京都中央区議会議会局：中央区議会会議録検索 https://www.kugikai.city.chuo.lg.jp/kaigiroku/index.html
23)大日方純夫：警察の社会史，岩波新書，p.23，1993.
24)復興事務局：帝都復興事業誌 土木篇 上巻，p.95，1932.
25)東京都中央区：中央区三十年史 下巻，ぎょうせい，p.1123，1980.
26)東京都会議録：2003.07.01 第 2 回定例会
27)千代田区議事録：2006.09.28 第 3 回定例会
28)中央区会議録：2008.09.11 防災等安全対策特別委員会
29)東京市：東京市史稿 市街篇第 71，東京市，pp.118-134，1980.
30)前掲 24).
31)千代田区議事録：2008.07.01 子ども施策特別委員会
32)日本トイレ協会：トイレ学辞典，柏書房，p.62，2015.
33)前掲 18)，p.80，1998.
34)千代田区議事録：2002.10.02 区民生活環境委員会
35)千代田区議事録：2005.09.29 区民生活環境委員会
36)前掲 17)，p.672.
37)千代田区議事録：2007.06.14 第 2 回定例会
38)前掲 5).
39)前掲 18)，p.85.
40)前掲 9).
41)中央区会議録：2015.03.16 予算特別委員会
42)千代田区議事録：2017.03.27 子育て文教委員会
43)前掲 2)，p.216
44)前掲 29)，市街篇第 71，pp.233-234，1969.
45)内務省：都市計画法令集，都市研究会，pp.146-146，1933.

注）図 2，図 3 は藤田らの図に筆者加筆